

日本中國學會報 第75集 抜刷
2023年10月7日 発行

学界展望 (哲学)

吾妻 重二
橋本 昭典
高橋あやの
井澤 耕一
佐藤 実
二階堂善弘

学 界 展 望

● 哲 学

はじめに

「学界展望」哲学部門は引き続き関西大学が中心となって担当した。2022年に日本国内で刊行された単行本を中心に、中国哲学・思想に関わりのある論著（訳書を含む）につき概述する。執筆方針は前回（第74集）と同様、論評よりも紹介に重点を置き、なるべく多くの情報を提示するよう心がけた。

各分野の執筆者は前回と同様で、次のとおりである。

- はじめに・総記： 吾妻重二（関西大学）
- 古代（先秦～漢）： 橋本昭典（奈良教育大学）
- 中世（三国～唐）： 高橋あやの（大東文化大学）
- 近世（宋～清）： 井澤耕一（茨城大学、宋元）、佐藤実（大妻女子大学、明清）
- 近代： 井澤耕一（茨城大学）
- 道教・仏教・民間信仰： 二階堂善弘（関西大学）
- 日本・朝鮮漢学など： 吾妻重二（関西大学）

それぞれの原稿は吾妻がとりまとめたのち、本学会出版委員会での検討を経て全体を調整した。

一、総記

中国哲学の通史もしくは俯瞰的著述がいくつか刊行された。中島隆博『中国哲学史』（中公新書）は副題に「諸子百家から朱子学、現代の新儒家まで」とあるとおり、古代から現代哲学までを広くカバーするとともに仏教、キリスト教、西洋近代哲学との対抗関係を視座に収めて叙述する。水口拓寿『中国倫理思想の考え方』（山川出版社）は儒教の形成と展開を「人と人とのつながり」すなわち倫理思想に焦点化してわかりやすく論じる。井ノ口哲也『道德思想と中国思想』（勁草書房）は中国の儒教道德とともにそれが日本の思想や教育にどのように影響したのかという視点で道德教育史を描き出そうとしている。

湯浅邦弘編著『よくわかる中国思想』（ミネルヴァ書房）は思想史の流れを縦とし、重要概念や人物を横に織りなす入門書である。吉澤誠一郎監修『論点・東洋史学 アジア・アフリカへの問い158』（ミネルヴァ書房）は158の「論点」をめぐる、最新の研究動向に照らしつつ「背景」「探究のポイント」とともにコンパクトに解説した指南書で、中国哲学に関わる内容も少なくない。

研究の手引きとしては他に二松學舎大学文学部中国文学科編『入門 中国学の方法』（勉誠出版）がある。文字学（漢字）、中国文学（神話と詩）、中国古典テキスト（論語）、日本漢学、域外漢籍、日・中書道、中国古典読解（漢文訓読）などの11章に分けて中

国学の方法を紹介する。

全般に関わる論文集としては、まず廖欽彬・伊東貴之・河合一樹・山村奨編著『東アジアにおける哲学の生成と発展 間文化の視点から』（法政大学出版局）の大冊が挙げられる。国際日本文化研究センターにおいて開かれた日中台韓越の研究者による共同研究の成果で、「東アジアにはどんな〈世界哲学〉の構想が可能なのか」という問題意識のもと、第Ⅰ部「日本哲学と西洋哲学」、第Ⅱ部「中国・台湾哲学と西洋哲学」、第Ⅲ部「日本哲学の多様な展開」、第Ⅳ部「中国と日本の思想的邂逅」、第Ⅴ部「朝鮮・ベトナムと知の越境」の5部、全44篇からなる意欲的な学際論集となっている。

渡邊義浩編『中国文化の統一性と多様性』（汲古書院）は2021年5月、東方学会が中国社会科学院古代史研究所との交流協定にもとづき開催したオンライン国際シンポジウムの成果で、哲学、歴史、文学、道教、書誌学にわたる18篇の論考を収める。隼雪艶・黒田彰編『孝文化在東亜的伝承と発展』（上海遠東出版社、2021）は『孝経』や孝子伝、孝子図、仏教との関係、日本文化と孝の関係などに関する日中の学者の論文19篇を収録する。

水口拓寿編『術数学研究の課題と方法』（汲古書院）は東方学会国際東方学会会議のシンポジウムをベースに6篇の論考を収め、中国伝統文化の一部を構成する術数学につき最新の成果を披歴している。

山口大学大学院東アジア研究科編著『東アジア文化の歴史と現在』（森野正弘・富平美波編集、白帝社）は歴史・言語・文学分野の論文11篇からなるアプローチ。板倉聖哲・塚本麿充編『コレクションとアーカイヴ 東アジア美術研究の可能性』（勉誠出版）は「東アジア美術研究・過去から未来へーコレクションとアーカイヴ」と「東アジア美術研究の現在」の2部に分け、中国を含む東アジアの美術研究とその新しい視角を提供する。美術史関連では水野裕史編『儒教思想と絵画 東アジアの勸戒画』（アジア遊学271、勉誠出版）が、儒教思想にもとづく勸戒画を21篇の論考により考察するユニークな研究となっている。

小浜正子・板橋暁子編『東アジアの家族とセクシュアリティ 規範と逸脱』（京都大学学術出版会）は論文11篇、コラム4篇により、規範の淵源たる中国古来の「家族」の変化を捉えつつ東アジアジェンダー秩序の未来を考えようとする新しい研究である。

個人の中国哲学関連研究書としては、儒教分野では黄俊傑著、工藤卓司監訳・吉田絵里訳『東アジア儒家仁学史論』（集広舎）が刊行された。国立台湾大学教授として東アジア儒教研究をリードしてきた黄氏の論考で、中国、日本、朝鮮の仁説を渉猟して考察を加え、「仁」の哲学の歴史と可能性を示す。蜂屋邦夫『中国の水の思想』（法藏館）は「水」をめぐる儒家と道家、諸子、経書の思想を論じ、同氏『中国の水の物語 神話と歴史』（同）は水にまつわる神話や治水・水利の事蹟に彩られた中国の歴史をたどる。

堀池信夫『夕映えのユーラシア 桜岳文稿3』（明治書院）はその遺稿集の最終巻で、中国思想の特色と展開を、地域的にはヨーロッパや日本を視野に入れ、時代的には古代から近代までを含みつつ、しかも実証的に論じる労作となっている。

『山田慶児著作集』（臨川書店）の第2巻「自然哲学」および第5巻「中国医学思想

II」も配本された。山田氏の自然科学史・科学思想研究は中国哲学研究に対しても有益な教示を与えてくれる。懐徳堂記念会編集『加地伸行文庫目録』（懐徳堂記念会）は大阪大学総合図書館に新たに収蔵された加地大阪大学名誉教授旧蔵書の目録で、漢籍2,500冊余を含む。

復刊・改訂版も多く、武内義雄『中国思想史』（講談社学術文庫）はもと1936年『支那思想史』として刊行され、その後もたびたび再刊された古典的著作。中島隆博『残響の中国哲学 言語と政治』（東京大学出版会）および『共生のプラクシス 国家と宗教』（同）は、それぞれ2007年と2011年に刊行された初版本の増補新装版である。金文京『漢文與東亞世界』（台湾・衛城出版）と『漢文与東亞世界』（上海三聯書店）は2010年、岩波新書として出版された『漢文と東アジア』の中国語改訂版（自訳版）で、このたびそれぞれ繁体字版と簡体字版として刊行された。（吾妻重二）

二、古代（先秦～漢代）

まず出土資料関連の成果として、草野友子『中国出土文献の思想史的研究』（汲古書院）がある。2010年代に発表された「上博楚簡」についての諸論考に、近年の「北大漢簡」「北大秦簡」に関するものが加わる。発表当初は文献の情報、釈読が備わり、速報的意味合いも帯びていたが、書籍化に当たり、全体として思想史への位置づけが図られ、地域的・時間的に限定される出土資料をどう全体史につなげていくかの課題に取り組む。谷中信一『『老子』河注・王注全訳解』（汲古書院）は、『老子』本文、河上公注、王弼注の全訳であるが、『老子』本文の底本に、北京大学出土文献研究所編『北京大学藏西漢竹書』貳（上海古籍出版社、2012）所収の「北京大学藏漢簡本『老子』」を用いるところに特徴がある。楚簡本、帛書本などの出土資料、通行諸本による校勘が行われ、各章末に異同が付される。河上公注、王弼注はそれぞれ四部叢刊本、宇佐美瀧水校訂本を底本とし、詳細な校注が施される。解釈についてもこれまでの諸成果を踏まえており、集大成的な書である。

池田知久・李承律『易 [上] 六十四卦』および『易 [下] 二三子問篇／繫辭篇／衷篇／要篇／繆和篇／昭力篇』（東方書店）は、馬王堆出土文献訳注叢書の一つとして出版されたもの。六十四卦の順序や易伝における儒家との関わりなど、すでに多くの論考がある「帛書周易」だが、本書は訳注にとどまらず、各篇に対し詳細な解説が付され、通行本や伝世文献との比較がなされる。下巻・易伝の諸解説では、「五経の首座に立ちうる経典がないという欠点を補うために経典化された」の観点のもと、戦国末から漢初にかけての思想状況が詳述される。また『郭店楚簡『老子』新研究』（曹峰・孫佩霞訳、江蘇人民出版社）は、2011年に刊行された池田知久『郭店楚簡老子の新研究』（汲古書院）の全訳である。

宇野茂彦『諸子思想史雑識』（研文社）は諸子百家の人物、思想、概念などをめぐる同氏の論考を集成した論文集として貴重である。

中島隆博『荘子の哲学』（講談社学術文庫）は、2009年の『荘子—鶏となって時を告げよ』（岩波書店）の復刊である。「あとがき」に13年間の『荘子』研究の新しい展開

が中国、台湾、欧米圏、日本の順に略述される。思惟構造の史的展開を捉えるには複数の注釈を有する古典が格好の素材となる。

渡邊義浩『孫子「兵法の真髓」を読む』（中公新書）は「後漢末を生きた曹操が整理した現行の『孫子』十三篇を曹操の解釈である魏武注に従って読んでいく」ことに特徴がある。前提として、『孫子』の複雑な文献的問題が2章を費やして平易に説かれる。終章では『三国志』武帝紀に見える曹操の戦いにおける『孫子』の生かしかたを検証する。『孫子』全文の現代語訳も付される。同じ渡邊義浩の『後漢書 本紀 [一]』（早稲田文庫）は、汲古書院から出た全訳の文庫化であり、本文と李賢注の現代語訳を載せる。

また渡邊義浩『「古典中国」における史学と儒教』（汲古書院）は、「古典中国」（秦から唐）における史学と儒教の関係を考察する大冊で、中国の史学がいかにして経学とは異なる独自の方法論を生み出し、国家の正統化を担うに至ったのかを論じる。阿部幸信『漢代の天下秩序と国家構造』（研文出版）は、前漢時代の内外観、国際秩序についての諸論考を取める。西嶋定生説の見直しから始まり、武帝期以前における王朝の礼や法が諸侯王国に及ばないことを、皇帝璽や賈誼『新書』などを手がかりにして指摘し、武帝期に生じる変化に説き及ぶ。

平澤歩『漢代経学に於ける五行説の変遷』（汲古書院）は、先秦から後漢までの五行説の複雑な様相、展開、相関関係、系統の再検討を行いながら、背後にある「五行」が首尾一貫した理論であるべきとする動向を明るみに出す。『尚書』洪範、『左伝』、『墨子』、『管子』、『呂氏春秋』十二紀、劉向、劉歆、鄭玄の諸説から『日書』、緯書までが丹念に分析される。小林春樹『中国古代史研究—天文・暦学を中心として』（大東文化大学東洋研究所）は1995年～2003年に発表された論考を取めたもので、「元和改暦」など後漢時代を中心に天文、律暦への考察を行い、「律暦思想」という思惟の内実に向ける。

荘奕傑『古代中国の日常生活 24の仕事と生活でたどる1日』（小林朋則訳、原書房）は、西暦17年のある1日を設定し、24人の1時間ずつを記述するというユニークな書である。著者はユニバーシティ・カレッジ・ロンドン考古学研究所准教授、原題は「24Hours in Ancient China」。医者、青銅職人、墓泥棒、農夫といった庶民階級を取り上げる。こうした記述を可能にするのは、近年の考古学的発見である。医者の章は経絡が記された漆人形でも話題になった四川省老官山の出土成果にもとづく。

このほか、富谷至編集『中華世界の盛衰 ～4世紀』（岩波講座・世界歴史5、岩波書店）には釜谷武志、古勝隆一らの思想史関連論考を取っていて有益である。

名著の復刊も相継ぎ、武田泰淳『司馬遷』（中公文庫）、金谷治『死と運命』（法蔵館文庫）が新たに文庫化された。加地伸行『韓非子 悪とは何か』（産経新聞出版）は1989年に講談社から出た『韓非子 悪の論理』の新版である。抄訳と4つの解説文からなる。訳文は1969年に出た本田済『韓非子』（筑摩書房）を大きな参考としたとあるが、本田訳『韓非子』も新たに講談社学術文庫に収録された。いずれも繰り返し吟味されるべき成果と思われる。（橋本昭典）

三、中世（三国～唐）

この時期の『論語』注釈に関して、高橋均『六朝論語注釈史の研究』（知泉書館）が刊行された。長年の『論語義疏』研究の成果を発揮し、魏・何晏『論語集解』から梁・皇侃『論語義疏』に至る39人の『論語』注釈につき精細な考察を施したものである。

野間文史訳注『論語注疏訓讀』（明德出版社）は何晏『集解』と邢昺『正義』を初めて全訓読訳する。末尾には解題や札記が付されていて参考になる。野間氏は『五經正義（附二禮疏 二傳疏）引書索引』（明德出版社）も刊行し、研究者への便宜を図っている。

訳注としてほかに渡邊義浩・高橋康浩編『全譯三國志』シリーズの第七冊、『呉書』（一）（汲古書院）が刊行された。北宋咸平刊本の原姿を伝える静嘉堂文庫所蔵の専刻本を底本とし、原文・訓読・補注・現代語訳を載せる。

大東文化大学東洋研究所編『藝文類聚（卷五十）訓讀付索引』（代表：田中良明、大東文化大学東洋研究所）は『芸文類聚』巻50職官部六の訓読と校異、索引を載せる。

注疏を用いた読解の手引きとして古勝隆一『中国注疏講義—経書の巻』（法藏館）が刊行された。基本篇で儒教經典を読むために必要な基礎知識や基礎資料を紹介し、読解篇で経書の短い段落を取り上げ、読解のヒントを提供する。附録として「訓話のいろいろ」「多音字挙例」「ピンインつき本文」があり便利である。

また敦煌を軸とした著述が二冊刊行された。伊藤美重子『敦煌文書にみる民間文藝』（汲古書院）は、第一部、第二部では敦煌文書の文学作品を用いて民間習俗や文芸の特徴につき論じ、第三部では敦煌文書を用いつつ『切韻』、『説文解字』、類書等の書誌的考察を進めている。高井龍『敦煌講唱體文獻研究—寫本時代の文學と佛教』（朋友書店）は、敦煌文獻中のかたり（講）とうたい（唱）を繰り返す講唱体写本に関する研究である。敦煌における講唱体文獻の受容と、写本としての文獻の受容と伝承を明らかにしている。

歴史学の立場から時代認識の再検討を迫る労作も複数ある。荒川正晴編集『中華世界の再編とユーラシア東部 4～8世紀』（岩波講座・世界歴史6、岩波書店）は、世界との関わりの中で中国史・朝鮮史・日本史を描く。各論考を展望・問題群・焦点に分け、切り口を新たにした世界史であり、中国思想関連の論考として戸川貴行「南朝の天下観と伝統文化」、下倉渉「交拝する夫婦—婚礼からみた中国ジェンダー史の一コマ」が取められる。

川本芳昭『世界秩序の変容と東アジア』（汲古書院）は、南北朝がそれぞれ構築しようとした世界秩序の変容という観点から、漢唐間の歴史変容について考察している。

岡田和一郎・永田拓治編『漢とは何か』（東方書店）は、後漢滅亡後から唐代までの各時代における漢王朝像について扱う。なお2023年5月には国際東方学者会議において、執筆メンバーによるシンポジウム「志」からみた漢唐間の政治文化」も開催された。

西田祐子『唐帝国の統治体制と「羈縻」』（山川出版社）は、『新唐書』の記述が北宋期の認識を踏まえたものであるところから唐代史史料による新たな視点から分析し直す

必要性を訴え、「羈縻」概念の実態解明を目指している。古畑徹編『高句麗・渤海史の射程—古代東アジア史研究の新動向』（汲古書院）は2020年、日本学術振興会の二国間交流事業にもとづく日本学メンバーを中心に編集された論集である。

美術関係では、熊坂聡美『雲岡石窟中小窟龕の展開—装飾・空間・工人』（法蔵館）がある。洛陽遷都前後に注目し、民衆による仏龕製作開始時期、中小窟龕と大型窟との関係などについて考察する。現地調査の成果をベースにしており、写真や図が多数掲載されている。

金維諾著・古田真一訳『中国美術全史 三国・南北朝・隋・唐』（科学出版社東京発行、東京大学出版会発売）は、中国人民大学出版社から刊行された同タイトルの日本語訳である（全4巻のうちの2巻目）。魏晋南北朝から隋唐に至る美術をジャンルごとに分け、豊富なカラー図版とともに解説する。なかでも仏教美術に関する記述が充実している。

このほか吉川忠夫『劉裕—江南の英雄 宋の武帝』（法蔵館文庫）が、1966年の人物往来社・中国人物叢書、1989年の中公文庫に引き続いての再刊となった。誤りを正し表現を改めたほか、「法蔵館文庫」のためのあとがきが加わっている。（高橋あやの）

四、近世（宋～清）

富谷至・荒川正晴編集『東アジアの展開 8～14世紀』（岩波講座・世界歴史7、岩波書店）に宋・元代思想を考察した論文が含まれている。金文京「士大夫文化と庶民文化、その日本への伝播」、佐々木愛「中国父系制の思想史と宋代朱子学の位置：中国ジェンダー史素描のために」がそれで、金論文は、唐代中期から元代に至るまでの間、士と農工商の間に、吏人（実務者）や軍人が出現し、彼らも社会的、文化的活動を担ったと指摘する。さらに士人層の分化について「隠遁」をキーワードに、その変遷を中国のみならず日本や朝鮮も含み考察している。佐々木論文は、冒頭、中国社会を強固な父系社会とし、それが「気」は父子間のみ継承されるという「父子同気」という観念によって支えられてきたとする滋賀秀三説に対し、経書の規定や朱熹、さらに明清期の儒者の説を考察したうえで、中国における父系社会の実現は、実は朱子学により牽引されたのではなく、明清社会からの強い要請があったためと論じている。

勉誠出版からは平田茂樹等編『宋代とは何か』（アジア遊学277）および瀧朝子編『呉越国 10世紀東アジアに華開いた文化国家』（同274）が刊行された。『宋代とは何か』所収の呉雅婷「宋代文士の旅行観—「遠遊」と「離別」から」は、宋人の「遠遊」「離別」感を分析したもので、宋の文人たちが離別の悲しみを乗り越え歩みを止めない思想を有していたこと、「遠遊」の実践の際、肉親に必ず行程の承諾を得る必要性があったことを指摘している。福谷彬「道学研究の最前線」は、従前の「道学＝朱子学＝宋学」の図式に対して、近年朱熹と同時代でかつ「道学」と称された種々の学派の思想が研究され始めていること、また近年の研究により、道学者を主とする南宋の士大夫たちが「地域を地盤としてコミュニティーを形成」する一方で「中央への進出を伺い」、それが叶わなくても「地域安定の主体として活動」していたことを明らかにする。『呉越国』

の所載論文としては、宋人も愛玩した牡丹の産地としての呉越国を多くの資料で考証した、久保輝幸「江浙地方と日本におけるボタン栽培の始まり—呉越国からの伝来の可能性」が興味深い。

訳注としては、『朱子語類』「大学」部分の訳注が中純夫編『『朱子語類』訳注 卷十八』（汲古書院）をもって完結した。本書は校勘本に京都大学蔵「万暦本」を加えている。あとがきでは、参加者の逝去や中氏自身の健康状態について触れ、訳注作成の困難さを述べておられるが、訳注作成に携わったことのある評者も大いに共感するところである。

このほか、1966年に人物往来社から「中国人物叢書」の一つとして刊行された梅原郁『文天祥』（ちくま学芸文庫）が再刊されたのも朗報である。（井澤耕一）

小浜正子・落合恵美子編『東アジアは「儒教社会」か：アジア家族の変容』（京都大学学術出版会）はサブタイトルにあるようにアジア（中国、日本、朝鮮、台湾、琉球、ベトナム）における家族のあり方から「儒教社会」と呼ばれている東アジアの社会そしてジェンダーの構造の変容を検討する。対象とする時代は近世から現代。儒教社会と一括りにされるが、時代と地域によっていかに多様であるかがわかる。巻末の地域間比較表が便利。

李贄について専論する阿部亘『李贄 明末〈異端〉の言語世界』（早稲田大学出版部）は、言語によって或る境地や実践を表現し伝えることができるのかという伝統的な言語哲学的問題につき、李贄がどのように対峙したかについて丁寧に分析する。

アリム・トヘテイ『イスラームと儒学—「回儒学」による文明の融合』（明石書店）は、近年盛んになりつつある明清時代中国のムスリム学者をめぐる研究で、豊富な資料によりイスラームと儒教の融合の様相を論じている。

川尻文彦『清末思想研究—東西思想が交錯する思想空間』（汲古書院）は清朝末期における思想空間を西洋と東洋という二項対立を避けながら、それらが交錯する場として「中国を中国として理解する」ことを企図する。「道徳」「文明」「哲学」「自由」といった概念をめぐる分析は漢語語彙史的にも興味深い。時代と地域の幅を広げた銭国紅『国家の想像と文化自覚—日中グローバル化の史的研究』（汲古書院）は、中国は明清から近代、日本は江戸から明治を主な対象として当時の知識人たちがどのように世界を認識したかを広く渉猟する。

歴史学関連では、明代の歴史を概説した岡本隆司『明代とは何か—「危機」の世界史と東アジア』（名古屋大学出版会）は著者の講義ノートを整理したもので、通読すると明代という時代のイメージを改めて把握することができる。文献解題を兼ねた「むすび」も簡潔にまとめられていて参考になる。

堀内香里『清代モンゴル境界考—遊牧民社会の統治手法と移動』（明石書店）は清代のモンゴルの境界（旗界）についての考察。これまで清朝側がこの境界（旗界）を設定したとされてきたが、檔案史料などから実はモンゴル社会側が必要としたものであり、それを清朝側が援用したことを明らかにする。

歴史関連の叢書としては、弘末雅士・吉澤誠一郎編集『東アジアと東南アジアの近世

15～18世紀』（岩波講座・世界歴史12、岩波書店）が刊行された。また集英社から出た『アジア人物史』は第7巻、第8巻がそれぞれ「近世の帝国の繁栄とヨーロッパ [16～18世紀]」、「アジアのかたちの完成 [17～19世紀]」というラインナップで、この時期を代表する中国・朝鮮・日本の思想家の伝記を載せる。

また科学技術史関連では、藪内清による宋應星『天工開物』の訳注が平凡社ライブラリーに加わった。『天工開物』が明末における、農業をはじめ染織、製塩、鑄造、醸造など各種の製造業に関する重要文献であることはいうまでもない。初版は1969年で、同社の東洋文庫から出版されたもの。東洋文庫版では原図が部分的にまとめられた箇所があったが、本版では本文とそれに対応する原図が近くになるようレイアウトが工夫されている。（佐藤実）

五、近代

川尻文彦『清代思想研究 東西文明が交錯する思想空間』（汲古書院）は多言語資料を活用し、近代中国の思想家たちが「西学」のみならず、明治日本の「東学」をも理解しようとした文脈に着目したもので、四部より構成されている。第一部「東西文明への視角」は、当時の知識人が東洋文明の立場から西洋文明をいかにとらえようとしていたのかを、「中体西用」論、「道德（moral）」「文明」をキーワードに考察する。第二部「東西の学知の連鎖」は、社会契約論、政治学、哲学など西洋の諸学知が中国においてどのように理解されたのかを分析する。第三部「自由への懐疑と模索」は、主に梁啓超の「功利主義」理解を取り上げて、清末の「自由」論の持つ諸相の一端を考察している。第四部「共和革命を目指して」では、「革命」論が興起した時期を、従前の革命史観では捉えることのできなかつた側面に焦点を当てて分析している。

森岡優紀『近代伝記の形成と東アジア 清末・明治の思想交流』（京都大学学術出版会）は、東アジアの近代初期における近代伝記の形成過程を論じ、当時の中国知識人が、西洋のみならず日本との思想交流を通して西洋の近代伝記への認識を深めたことを論じる。ワシントン、李鴻章、戊戌六君子の、中日両国で刊行された伝記、史書を詳細に考証し、中国で著された伝記が、先行する日本で出された伝記から多大な影響を受けていたことも明らかにしている。

伝記や著作の訳注としては、岡本隆司『曾國藩』（岩波書店）、佐藤公彦編訳『胡適政治・学問論集』（汲古書院）が挙げられる。岡本書は、曾國藩を「矛盾」「虚実」に満ちた人物と評した上で、その果たした役割を太平天国の乱鎮圧を中心に述べている。そして最終章「枢を覆って」では、清末から民国期における曾國藩顕彰を梁啓超や蔣介石などの言説によって紹介し、人民共和国成立以後、それが一転、悪評に転じてしまったと説く。佐藤編訳書は、平凡社東洋文庫として2021年に出された『胡適文選』1・2に入らなかった胡適の政治・学問論をほぼ発表順に配列したものである。1917年の「文学改良芻議」から1960年「中国の伝統と将来」に至る文章を本書解題とともに読めば、胡適一生の思想を順を追って理解する助けになるだろう。

中国思想そのものではないが、その周辺の日中文化関係史やジェンダー、美術に関す

る書籍としては、勉誠出版から和田博文・王志松・高潔編『中国の都市の歴史的記憶 一九世紀後半～二〇世紀前半の日本語表象』、中国ジェンダー研究会編『中国の娯楽とジェンダー』（アジア遊学 267）、瀧本博之・戦暁梅編『近代中国美術の境界』（アジア遊学 269）の3冊が刊行された。『中国の都市の歴史的記憶』は近代日本人の中国における異文化体験を記した書籍や雑誌記事を取り上げた斬新な研究。序論と座談会に続き、中国の北部、中部、南部の3章に分け、16都市をめぐってかつての日本人の足跡と記憶を浮き彫りにする。『中国の娯楽とジェンダー』は、民国期以降の映画、演劇、雑誌、スポーツ、旅行などの娯楽が実践されるなかで男女の性別はどのように意味づけられ、関係づけられ、再構築されたかを論じたもの。『近代中国美術の境界』は、龔珏のコラム「近代中国における「裸体画論争」」が、裸体画をめぐる日中間の反応の相違を指摘していて示唆的である。（井澤耕一）

六、道教・仏教・民間信仰

道教研究の分野では、まず山田俊『金朝道家道教の諸相』（汲古書院）が挙げられる。金朝の道教研究については、これまで全真教などの新道教に偏りすぎた面があり、バランスを欠いていた。同書は宋・金の道家思想、道教をより幅広く考察検討するもので、道家文献の注釈書、道教經典、さらに石刻資料まで広く検討し、重厚な内容をもつものとなっている。

李觥書『晋唐道教の展開と三教交渉』（汲古書院）も重要である。六朝期から唐代にかけては道教が教理、經典などを整備させていった時期であり、この時期の經典と思想について、仏教や儒教との関連を視野に入れつつ詳細に論ずる優れた論考となっている。

『中国道教美術史 漢魏晋南北朝篇』（土屋昌明・齋藤龍一監訳、勉誠出版）は李淞『中国道教美術史』第一巻（湖南美術出版社、2012年）の全訳で、道教美術という新しい視点から出土文物、道教の神像などの彫刻資料を丹念に論じている。特に、南北朝期の重要な道教の神像についてはこれまで日本ではほとんど知られていなかったと思われる、美術史研究の立場からしても新しい成果を含んでいる。

菊地章太『儒教・仏教・道教 東アジアの思想空間』（講談社学術文庫）は、2008年に出版された講談社選書の復刊である。一般の読者向けに書かれたものだが、アジア宗教のみならず、ヨーロッパの宗教にも造詣の深い作者の洞察と指摘に溢れており、示唆に富む内容となっている。

歴史的に、医学に携わる者たちは道士が多かった。小曾戸洋『中国伝統医学 名医・名著小百科』（あじあブックス 82、大修館書店）は、上古から近現代までの名医とされる人々の伝と、伝統的な医書を紹介したものである。神農・黄帝から始まり、扁鵲や華陀、孫思邈などの多くの人物を紹介する。

中国仏教研究の分野では、西脇常記『中国思想史論攷 宗教のある風景』（知泉書館）がある。キリスト教との関連を論じたところもあるが、多くは中国仏教について論じたもので、特に六朝期の仏教の動向が詳細に論じられている。菅野博史『中国仏教の經典解釈と思想研究』（法藏館）は、やはり六朝期の仏教思想について論ずるもので、

特に法華思想に詳しい。

齋藤隆信『隋東都洛陽上林園翻經館沙門 積彦琮の研究』（臨川書店）は、北周から隋の時代を生きた積彦琮の著作や思想を分析し、これまで見過ごされてきた積彦琮の功績について考察している。

船山徹『仏教漢語 語義解釈—漢字で深める仏教理解』（臨川書店）は南北朝隋唐から北宋における50の仏教漢語を取り上げ、漢語文化圏における仏教受容史の一端を解き明かしている。また倉本尚徳『儀礼と仏像』（臨川書店）は、一般向けの内容でありながら深い分析を伴った記述が多く見られ、示唆に富んでいる。

禪宗に関しては、小川隆『禅僧たちの生涯—唐代の禅』（春秋社）が唐の禅僧それぞれの人生に触れつつ唐代禅全体のあり方を魅力的に伝えている。

より広い視点から仏教を扱うものに、櫻井義秀『東アジア宗教のかたち 比較宗教社会学への招待』（法藏館）がある。タイの仏教に始まり、中国・台湾・韓国の宗教文化を探っており、東アジア宗教の理解を深めるのに役立つであろう。

義浄のインド旅行記である『南海寄帰内法伝』を訳した『現代語訳 南海寄帰内法伝：七世紀インド仏教僧伽の日常生活』（宮林昭彦・加藤栄司訳、法藏館）も刊行された。同書が当時のインドの様相について伝えるとともに、情報の少ない東南アジアの状況も伝える重要な資料であることはいままでもない。

民間信仰研究の分野では、三尾裕子編著『台湾で日本人を祀る 鬼から神への現代人類学』（慶應義塾大学出版会）が注目すべき著作である。台湾ではさまざまな神々の信仰が展開しているが、歴史上功績のあった人物も神として祀られている。日本の神社でも同様の現象は見られるが、台湾統治時代の日本人を神として祀るという現象は、かなり特異である。本書はその現象について詳しい調査と分析を行ったもので、この台湾「日本神」研究は今後注意すべき分野であろう。

小俣喜久雄『鄭成功信仰と伝承』（新典社）も、台湾の信仰研究において貴重な著作といえる。鄭成功は開台聖王という称号で神として祀られており、台湾には数多くの廟がある。また従神として併祀されることも多い。本書はその由来から始まり、雲林や嘉義などにある鄭成功廟を丹念に調査、東南アジアにも広がる鄭成功信仰について総合的に考察した大作である。

また陰陽道史研究会編『呪術と学術の東アジア 陰陽道研究の継承と展望』（アジア遊学 278、勉誠出版）も意欲的な内容である。「呪術としての陰陽道」「学術としての陰陽道」「東アジアという視点」という3部構成からなり、異なる視点から多様性を持つ陰陽道について分析している。
(二階堂善弘)

七、日本・朝鮮漢学など

この分野は日本史や日本思想史側から中国の哲学思想に触れる著作を含めるとかなり多い。全般的な論集としては高田宗平編『日本漢籍受容史—日本文化の基層』（八木書店）が重厚で、漢籍・漢学が日本文化諸分野の形成に与えた影響とその特質を総合的に論じる。古代、中世、近世、文献研究の4部構成をとり、日本・中国・台湾の各分野の

研究者 28 名が論考 24 本とコラム 4 本を寄せる。

峰岸明『変体漢文』（吉川弘文館）は変体漢文を日本語学の観点から概説した労作で、1986 年東京堂出版本の新装版復刊である。

古代・中世に関しては浜田久美子『日本古代の外交と礼制』（吉川弘文館）が隋唐の外交儀礼や外交文書、新羅や渤海との外交を分析し、古代国家形成の過程には法整備以外に礼整備の段階があったと指摘する。

河添房江・皆川雅樹編『「唐物」とは何か 舶載品をめぐる文化形成と交流』（アジア遊学 275、勉誠出版）は、奈良時代から室町時代にかけて中国から舶載された「唐物」をめぐる論集。2011 年に刊行された『唐物と東アジア』（アジア遊学 147）の第 2 弾として、人・モノ・情報の移動・交流から見た日中文化交流の様相を論じている。

近世に関しては澤井啓一『伊藤仁斎 孔孟の真血脈を知る』（ミネルヴァ書房）が、京都を中心とする文化人や公家衆との交流、さらには同時代の東アジアの思想空間の中に仁斎を位置づけ、その学問を立体的に浮かび上がらせた新しい仁斎像を描いている。

町泉寿郎『日本近世医学史論考』Ⅰ・Ⅱ（武田科学振興財団）も重要である。上巻「前近代の医家たちとその学び」は 770 頁、下巻「幕府医学館とその考証医学」は 778 頁に及ぶ文字どおりの力作。医学史研究の専著だが、その広範で実証的な考察は江戸時期の漢学や漢学者、儒学思想解明にも裨益するところが多い。

清水則夫・三浦国雄監修『浅見綱齋全集稿本』全 3 卷（ペリかん社）は大正 4 年（1915）、舞田敦が編集し、現在、大東文化大学図書館に蔵される舞田手稿本を影印し解題を付したもので、綱齋研究のための基礎資料として貴重である。ここにはなぜか綱齋の『家礼師説』が取められていないが、同書は吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』9（関西大学出版部、2021）に影印、翻刻されていることを付記しておく。

吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇』10（関西大学出版部）は朱熹『家礼』に関する文献の影印シリーズ 10 冊目にあたり、綱齋と同じ崎門派の三宅尚斎『朱子家礼師説』のほか、尚斎門人による関連著作を収集、影印するとともに詳細な解説を付している。

稲田篤信『日本近世中期上方学芸史研究 漢籍の読書』（勉誠出版）は、儒学のみならず文学、医学、書画など近世上方の学芸が漢籍の受容のもとに展開していたことを都賀庭鐘『過目抄』、奥田尚斎『拙古堂日纂』などの漢籍抄録、『世説新語補』の書入などによって明らかにする。明木茂夫編著『豊田市中央図書館の江戸期学芸書—雅楽資料『山鳥秘要抄』とその周辺』（汲古書院）は、豊田市中央図書館に蔵する江戸末期の楽人安倍季良『山鳥秘要抄』を中心に、新たに見出された同館所蔵の他の楽書も用いてその内容、音楽理論の展開、三河国諸藩の雅楽活動などを調査・研究したもの。近年盛んになりつつある江戸時代の礼楽研究、とりわけ楽律・音楽研究に新たな奇与を加えたものといえる。

河合一樹『大和心と正名 本居宣長の学問観と古代観』（法政大学出版局）は、中国思想（漢意）に囚われた知のあり方を厳しく批判した宣長をめぐる、その孔子観や儒教の「正名論」を手がかりに儒学者・国学者たちの言説や同時代の思想状況に考察を加

える。

幕末から近代に関しては、三宅康久『山田方谷の通貨政策とマネジメント 備中松山藩の財政再建とその本質』（大学教育出版）が、マネジメントのあり方を備中松山藩における財政再建の視点から考察する。厳密には学術書とはいえないが、経営学の観点から陽明学者山田方谷の施策を論じた点に特色がある。

荒尾禎秀『日本語学から見た和刻本『福恵全書』一索引と素描』（汲古書院）は、幕末維新期に和刻本として版を重ねた地方行政の心得『福恵全書』をとり上げ、同書の近代日本語形成や近代日本法制に果たした役割を論じる。

藩校・漢学塾に関しては、大石学編著『徳川斉昭と水戸弘道館 水戸藩が威信をかけて創設した文武の“総合大学”』（戎光祥出版）が水戸藩校・弘道館につき、最新の研究成果をふまえつつ、関係写真を多数掲載して論述する。東日本大震災からの復旧や世界遺産認定に向けた取り組みも紹介している。鈴木理恵『咸宜園教育の展開』（広島大学出版会、2021）は日本最大の私塾とされた九州日田の咸宜園につき、咸宜園独自の教育システムが同塾門人の開いた塾（系譜塾）を通して各地へと展開し、明治期にも継続した様相を描いていて興味深い。

横山俊一郎著・吾妻重二監修『泊園書院の人びと その七百二人』（清文堂出版）も刊行された。大阪の漢学塾「泊園書院」で学んだ門人の略伝集であり、肖像写真も可能な限り掲載されている。同書院出身者の多彩な活躍を初めて明らかにした著作であり、幕末・近代における漢学塾の貢献度を知る良い手引にもなっている。

近代の漢学者西村天因をめぐるのは、湯浅邦弘『世界は縮まれり 西村天因『欧米遊覧記』を読む』（株式会社 KADOKAWA）がある。明治43年（1910）、天因が朝日新聞記者として船で世界一周した際の記録『欧米遊覧記』について、新発見の手帳などを活用して出発から帰国までを抄訳、解説・写真つきで紹介している。湯浅邦弘『西村天因旧蔵書印』（大阪大学文学研究科）も出された。

内藤湖南に関しては、陶徳民編著『内藤湖南の人脈と影響—関西大学内藤文庫所蔵還暦祝賀及び葬祭関連資料に見る』（関西大学出版部）が貴重な資料や写真を提供している。

朝鮮関係の著書としては、車溶柱著・豊福健二訳補『朝鮮漢文学史』（朋友書店）が上梓された。1995年に『韓国漢文学史』として刊行され、2008年に増補された『改稿韓国漢文学史』の全訳。全840頁余の分量を持ち、現行の朝鮮漢文学史としては最も大部で完備したものという。補注や解説も充実している。

矢木毅『評伝 成牛溪 朝鮮の孔子廟と儒学者』（臨川書店）は、朝鮮中期の儒学者成渾（牛溪）の日本初の評伝。成渾は理気をめぐる李珥（栗谷）との論争で知られるが、本書はそれにとどまらず政界との関わり、党争、壬辰倭乱（文祿の役）での対応、文廟従祀への道程など、朝鮮王朝における儒教社会の特質を浮かび上がらせている。

（吾妻重二）